

新CL寓話一区

2019

David K. Reynolds, Ph.D.

第1部

Foxes and Feelings

9. 狐と感情



そのキツネは賢い動物でした。キツネのいたずらでキツネの妻に多めに厄介をかけましたが、いつもフォックス夫人の怒りがおさまって、また面倒を起こす前には許されました。

例えば先週、森の道を他の人に通させるのに、誰がよけるべきかフォックス氏はサミー・スカンクと口論を始めました。たくさんの叫び声と罵倒の後にスカンクは身を引きました、しかし同時に、その道を通った者に何日間もひどいにおいがするように、通ったあとに臭いにおいをかけました。

フォックス氏は自分が勝ったと思いました。匂っても匂わなくても道は自分のものと考えました。そこで、頭を毅然と高くして、鼻孔を閉じた状態で、サミー・スカンクがスプレーした臭い匂いの小道を横柄に歩きました。

言うまでもなくフォックス夫人は自分たちのすみかで、いい匂いではない夫は居て欲しくありません。しかし、フォックス氏は、成り上りものスカンクに反対すべき家族の名誉を守るのだと妻に話しをしました。その夜夫人がついに態度を軟化して、外の霧の中に座った夫が哀れに見え、臭さとすべてを許して、家の中に入るよう許しました。

数日後には臭いは消え、夫人は今回の夫のことを忘れました。その間、フォックス氏はキツネの中で、もっとも罪がない者のように気を遣ってふるまいました。年取った仲間のフクロウ氏が居眠りしていてもからかったりせず、新しく熟した赤いラズベリーを食べ過ぎず、料理や皿洗い、掃除をするフォックス夫人を手伝いました。言い換えればフォックス氏はキツネの模範でした…悪臭がなくなるまでは。それから、また彼は問題を起こしに外にうろつきはじめました。

近くの農場から少年グループがピクニックバスケットを置いて、泳ぐ穴の方に向かって走り出しました。着ているシャツをさっさと脱いで、凍るほどに冷たい水の中に飛び込みました。少年たちは大はしゃぎです。夏の最初の水泳を楽しんでいました。フォックス氏はこの瞬間に目が覚めました。

少年たちはピクニック・ランチを忘れてしまったようだ、とつくづく眺めて考えました。まあ、私は少年たちが置いていったランチボックスを覚えている。とバスケットに近づいて、サンドウィッチをがつつ食べ始めたのです。

「少年たちは水泳にはしゃいでとても楽しんでいるから、私が早めのランチを食べたのに気がつかないだろう」。

2, 3時間後でもまだ満足そうにおやつをむしゃむしゃ食べていました。おなかはとてもいっぱいになり、食べたいものだけを摘まんでいました。ピクルスをひとかけら、チョコチップクッキーを一かじり。サクサクしたフライド・チキンの足を食べ始めたちょうどその時に、ひどく怒った少年グループに囲まれ

た真ん中で顔を上げました。

「少年たちはとても楽しんでるはずなのに、どうして泳ぎをやめたんだろう？」

キツネは自分を獍猛（どうもう）に見せようとしたが、うなろうと歯をむき出そうとしても、満したあくびだけが出るだけでした。それほど満腹でした。

その晩、痣がついた血まみれのフォックス氏が妻の居る家に体を引きずって戻りました。毛皮の大きなパッチがコートから消えていて、醜い赤いこぶが右目の上に目立っていました。

「お昼を食べていると、少年たちが私を待ち伏せて襲ったんだよ」と妻に本当のことをあますところなく話すどころか不平を言いました。

フォックス夫人は「ええ、スズメの双子から一部始終を聞きましたよ」と答えました。「私は少年たちは泳ぐのに疲れたんだと思います。少年たちは確かにおまえさんの赤い足を捕えたのでは？」と不機嫌に夫を見ました。

フォックス氏は家の隅におとなしく丸くなって寝て、妻の怒りが過ぎ去るのを待ちました。この時すでに、彼は感情についての教を学んでいました。


妻の怒りと少年たちの興奮はフォックス氏が以前考えたことのなかったとてもだいじな方法でした。横たわってこの新しい考えを深く考えていると、痛みはおさまってきて眠りにおちました。

これは感情は変化するという物語です。フォックス夫人は夫に腹を立てますが、時間がたつと怒りは薄れていきます。少年たちは、泳ぐのに興奮しますが、しばらくすると泳ぎ疲れ、興奮はおさまってきます。

少年たちのランチを盗み食いする前は、フォックス氏はとても腹ペコでした。食べた後は、お腹のすきはまったくありません。痣の痛みは数日のうちに消えるでしょう。感情は時間の流れで薄れていきます。悲しい感情も薄れていきます。幸せな感情もそうです。すべての感情は、再び感情に刺激を与えないかぎり薄れていきます。

感情が薄れるのは良いことです。落ち込んで気持ちが沈んでいるとき、意気消沈した感情が後で薄れていくことを知っています。大事な人と別れたり、先に亡くした深い悲しみは長い間に薄れていくでしょう。深い嘆きも永遠に続くことはありません。

(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)

 [目次へ戻る](#)